
冒険者メメント・モリの手記

明日風エリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者メメント・モリの手記

【Nコード】

N7699H

【作者名】

明日風エリ

【あらすじ】

墓守の少女メメント・モリが、死について知るための冒険に出た。ゴブリンたちとの戦いを経て、彼女が辿り着いた結論は――。

(前書き)

若干残酷表現が混ざっています。ご注意ください。

【3月】

私は幼い頃から墓守として生きてきた。

たくさんの屍を見てきた。

たくさんの棺を埋めてきた。

たくさんの墓を建ててきた。

けれど、それらは死の結果による副産物でしかない。

私は、死そのものに触れたことがほとんど無い。

私は、死を知りたい。

たとえ羽虫を潰したところで、動いていたものが動かなくなったという感覚しか得られない。

死は誰にも平等に訪れるものだと言われるが、羽虫の死と人間の死が等価であるはずがない。少なくとも、私にとっては。

ならば、人を殺せば死の意味を知ることができるか。

おそらく、イエスだろう。

だが、当然ながらそんなことをするわけにはいかない。

だから私は、冒険者という道を選んだ。

死と隣り合わせの世界。

殺すか、殺されるかの世界。

おそらくこの世界に飛び込めば、手がかりを得られるだろうとい

う確信が私にはあった。

明日、私は、死をめぐる冒険に出る。

【4月】

痛い。身体がすごく痛い。

なぜなら、私ははじめての冒険で、二度も罠にかかったからだ。
一度目は、仲間の一人が扉を開けた時に落ちた落とし穴。

二度目は、同じ仲間が空の宝箱を開けた時に飛んできた針だ。

別に私は彼を恨んではない。

ぼんやりしていた私も悪かったのだし。

それに、本当に責められるべきは、罠を仕掛けたゴブリンと考えるのが妥当だろう。

そんなことより、二度目の罠である針が、私にだけ飛んできたのはなぜだろう。

運が悪かったのだろうか。

それとも、私の気持ちを汲んだ神が、より死に近いところへ私をいざなってくれたということなのだろうか。

実際、私は死ぬかもしれないと思った。

これを書いている今でさえ、うっかり体をよじってしまうと激痛で気が遠くなるほどの、重傷を負ってしまったのだから。

けれど、仲間たちは私を温かく励ましてくれた。

もう少しだから、ゴブリンの攻撃からは必ず守るから、頑張れ、

と。

なぜ、初めて会って間もない私に、そこまでしてくれたのか。

はじめての冒険で死者が出て冒険が失敗すると、「駆け出し」の称号さえもらえないと聞く。

彼らはそれを防ぎたかったのだろうか？

多分、そうではない。

彼らは見たくなかったのだ。私の死を。

冒険生活の思い出の最初の1ページを、そんな記憶で穢されたくないかったのだ。

ゴブリンには遠慮なく死を与えられるのに、自分たちの仲間が死ぬのは嫌なのだ。

ゴブリンだろうと人間だろうと羽虫だろうと、殺されれば、当人にとっての世界が閉ざされるのに変わりはないのに。

業が深い生き物だ。人間というのは。
そして、私もまた、その中の一人だ。

ちなみに、私はゴブリンの頭を斧で割った後、激しく嘔吐した。
そんな風になったのは私だけだった。
すぐに慣れるだろうから気にするな、と誰かが言った。
おそらく、その通りになるのだろう。

ああ、それにしても、痛い。
これだけ痛くても死なないなんて、案外人間は頑丈なものだ。

【5月】

（空白）

【6月】

目を覚ましたら、白い天井が目に入った。
私は病院のベッドに寝かされていた。

看護師に聞いたところによると、私は一ヵ月近くもの間、昏睡状態にあったようだ。

回復したのは奇跡的なことらしい。

何が起きてそうなったのかは、すぐに思い出せた。
ゴブリンに胸を剣で刺されたのだ。

不覚をとった原因は簡単だ。

ゴブリンに死を与えることを、ためらってしまったからだ。

前の冒険でゴブリンの頭を割った時の、耳障りな断末魔や、吐き気を催す血肉の臭い、飛び散って顔にかかった液体の生暖かさを、思い出してしまったからだ。

もし相手が虫だったら、私は平気だったろう。

けれど、相手はゴブリン。“人型の”怪物なのだ。そのせいで迷いが生まれたのだらうと私は思う。

初めは人を殺すことさえも罪で無ければいいと思っていた私

だが、あの時はそうではなかったのだ。一度、生々しいゴブリンの死に触れた後だったから。

しかしながら、おかげで、貴重な体験ができた。
すなわち、死後の世界を垣間見るといふ体験だ。

真っ暗だった。

静かだった。

匂いも無かった。

味もしなかった。

何かに触れているという感覚さえも皆無だった。

川とか、花畑とか、城とか、そういったロマンチックな風景は存在しなかった。

死んだ知人との再会もしなかった。

私はただただ、闇の中に浮かんでいた。

動かせる四肢も無かった。

金縛りにあった時とよく似た感じだった。

死はあらゆる苦しみからの救いだと人が語るのを、私はよく聞いてきたのだが。

冗談じゃない。

こんな救いがあったたまるか。

私は、死はゴールテープを切るようなものだと思っていた。
だが、違った。死は、いわば崖だ。地面の無い、無限の奈落だ。
死は終わりではなく、終わり続けることなのだ。

人が死んだ際、よく「冥福を祈る」という言葉が交わされるが、

あんな状況に福も何もあるものか！

例のゴ布林退治で死にかけたのは、私だけだという。

良かった。こんな目に遭ったのが私だけで。

良かった。他の誰かが私の前で死んで、それで私が何かが解ったような気持ちになるなんていう愚かしい事態にならなくて。

それでも、それは、私が知覚できている限りにおいてのことに過ぎない。

この世界では、常に、どこかで誰かがあの永遠の牢獄に送られ続けているのだ。

なんということだろう。

考えてみれば、生きているということは、何かを食べているということであり、つまり何ものかを殺し続けているということだ。

やっと解った。それがどんなに罪深いことか。

それでも私は、その業を背負って生きていかねばならないのだ。なぜなら、自分が死ぬのは怖いから。

あの牢獄に行くのを、少しでも後に延ばしたいから。

生きている間に、できる限りの幸福を感じていたいから。

もう、自ら死に近づくようなことはしない。知るべきことは知ったから。

私はこれから、生きていく。

いつか来る死を想いながら。

|
M
e
m
e
n
t
o

m
o
r
i

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7699h/>

冒険者メメント・モリの手記

2010年10月20日19時49分発行